

3年道德通信

第9号

第9回『希望の義足』

真美さんは、日本各地から寄付を募り、ルワンダ内戦で負傷した人々のために義肢工房をオープンさせます。

あるとき、義足と肌の色が違うのが嫌だという患者が現れ、「ただなのだから、この程度でいいだろう。」という自分の中にあった「甘さ」に気づきます。

また、真美さんは「パラリンピック」にルワンダ代表としてセザールさんを送り出し、人々の心の復興にも取り組みます。現在は、義肢の提供に加え、義肢装具士の育成にも力を入れています。



みんなの意見

真美さんが気づいた「甘さ」とは、どのようなことだと思いますか。

- 患者の気持ちを考えていなかった。
- 義足はその人の体の一部だから、作ればいいというわけではない。
- 自分としては良いことをしていると思っていた。
- 歩けることに満足してもらえばいいと思い、肌の色まで配慮しなかったこと。



パラリンピックにルワンダ代表を送りたいと思った理由は？

- 紛争で傷ついたルワンダ人たちが希望を与えたかった。
- 障害を抱えて生きる人たちに希望を与えたかった。
- 勇気づけるため、パラリンピックを通して発信する。
- 皆で一つになって応援したいから。



真美さんの挑戦を支えているものは何でしょう？ 今日の感想

- 世界にはいろいろな人がいて、いろいろな状況があって、いろんな思いを持っている人がいると思った。自分の悩みなんて、小さいと思った。
- ルワンダで困っている人たちを助けるために活動している真美さんはすごいと思いました。
- 大変な状況の中、困っている人たちを助けてあげたいという思い。
- 義足をもらった人たちの喜んでる顔。



世界の中の日本人として
行動するのに大切なことは何だろう。